

腹腹時計

VOL. 2

東アジア反日武装戦線K F部隊(準)

発行日 1979年2月28日

発行 東アジア反日武装戦線K F部隊(準)
(葛飾区小菅 1-35-1)

連絡先 K Q通信社(東京都下谷郵便局 私書箱 99号)

頒価 500円

目次

基調提起	2
——中樞殲滅戦を軸とした大衆的反日都市ゲリラ戦の展開を！——	
日帝本国における反日武装闘争史（抄）	11
反日武装闘争の勝利のために（1）	15
——東アジア反日武装戦線“狼”部隊の組織的観点からの総括——	
反日武装闘争の勝利のために（2）	28
——反日都市ゲリラ兵士の守るべき原則——心得について——	
反日赤軍への転生を！	37
——日本赤軍77・5・30路線転換に対する我々の見解——	
緊急アピール	65

〈基調提起〉

中枢殲滅戦を軸とした大衆的 反日都市ゲリラ戦の展開を！

(一) キソダニ・テメンゴール作戦の切り拓いた地平

(1) その戦術的意義

一九七八年九月二八日東京地裁七〇一号法廷に検事側証人として、間組の八田昌夫が出廷した。この男は一九七五年二月二八日当時庶務課長で、現在は総務部長らしい。検察官の「犯人への被害感情は？」という問いに対して、「痛み骨髄に達しています。極刑に処して欲しい」と泣きを入れた後で、弁護人の反対尋問に対して次のように答えた。「コンピュータ、情報機器機能は九階に集中していた。」「データは全部焼けた。プログラムカードも全部壊滅した。」「コンピュータ設備のうち特に高価な磁気テープも高熱で使用不能になった。」「コンピュータ業務は同年六

月一杯まで中断。その間、他処で行なった。」「九階の館物の修復は六月一〇日頃までなかった。」「この事件の影響で取引きが中止になったことはなかったが、痛手は非常に大きかった。」「被害は約一五億。それは館物・施設の被害額であって、情報的な被害は一切含まれていない。情報的な被害は計り知れない額である」……。

一九七四年八月マラヤ共産党武装勢力は、テメンゴール・ダム及びこの付近で工事中の東西ハイウエーの建設を、「人民の利益に反する」と糾弾し、テメンゴール・ダム建設現場へ向かう間組の資材搬入トラックをダイナマイトで爆破した。同年一二月九日には、テメンゴール・ダム建設の間組宿舎を武装攻撃、日本人一名が死亡した。この闘争の前後、クアラルンプールの日本大使館・間組・三菱商事

事務所などに「ダム工事の即時中止と技術者の総引上げ」などを要求した反日ビラや要求書が配布された。これに対して、間組は、「完全な保安対策が講じられない限り工事はやれない」とゴネて、マラヤ共産党武装勢力に対する反革命弾圧を現地政権に強く要求した。一九七五年一月には、

日本大使館に、「日本政府がダム建設に借款、援助の中止をしなければ、日本人にかかわる面白からぬ事故が再発するだろう」という警告文がとどいた。にもかかわらず、同年二月一四日、間組は現地反革命軍に守られて工事を再開した。

東アジア反日武装戦線の三戦闘部隊は、マラヤ共産党武装勢力の12・9間組攻撃の報に接するや、日帝本国人としてこの戦いに戦闘呼応し、間組のテメンゴール・ダム建設工事を具体的に阻止することの重要性を確認し、ただちに準備活動に入った。そして、12・9から約三カ月後の一九七五年二月二八日、間組本社6F（海外工事務局）、9F（電算器室）及び大官工場に対して同時爆破攻撃を決定した。

このキソダニ・テメンゴール作戦の戦術的意義の第一は、三戦闘部隊の初めての共同作戦として、相互の戦士的な信頼関係の上に立って、三戦闘部隊の総力を結集し、技術性の粋を尽して克ちとられたという点である。

戦術的意義の第二は、一九七五年に入り、一段と強化された敵の事前弾圧的警戒体制を巧みに縫って、緻密に計画

され、周到に準備され、大胆に実行され、ほぼ作戦計画どうりに成功したという点である。

戦術的意義の第三は、中枢殲滅戦への質的飛躍の実現という点である。

キソダニ・テメンゴール作戦は74・8・30の三菱重工爆破作戦の限界を乗り越えた。三菱重工爆破作戦は、日帝の中枢的侵略企業である三菱重工に対する爆破攻撃という絶対的な政治的正当性をもっていたにもかかわらず、新左翼的なカンパニア主義・象徴主義から自らを明確に区別し得ていなかったために、爆破対象を厳密に絞りきれず、中枢殲滅戦として作戦を立てられず、殲滅すべきでない通行人を多数殺傷してしまうという戦術的限界を露呈してしまった。

キソダニ・テメンゴール作戦は、中枢殲滅戦の方向で立案されながら、中枢殲滅戦としては未貫徹であった三井物産爆破攻撃の方向性を継承し、さらに発展させ、三菱重工爆破作戦のカンパニア主義的象徴主義の限界を明確に乗り越えた。この質的飛躍は、何よりもマラヤ共産党武装勢力の12・9戦闘というつきつくと、それに何としてでも具体的に応え、肉薄せんとした、三戦闘部隊の思想的内圧が結実させたものであった。

(2) その戦略的思想的意義

このようにして日帝本国内に登場したキソダニ・テメンゴール作戦の戦略的思想的意義を、現時点で、我々は次の

ように確認している。

① まず第一に、キノダニ・テメンゴール作戦は、一九七四年八月及び一二月九日のマラヤ共産党武装勢力による、日帝のマラヤ再侵略の先兵Ⅱ間組に対する武装攻撃を、日帝本国人に対する戦闘指令（つきつけ）として受けとめ、具体的に戦闘呼応するものとしてあった。すなわち、まさに、日帝本国中枢において、日帝の侵略活動に具体的に打撃を与えるという事実行為をもって、歴史的にも現在のにも日帝の侵略を許容し、それに寄生してきた日帝本国人としての反革命性の自己否定・自己批判実践を貫徹し、被植民地化攻撃を受けているアジア諸国民の革命戦争に合流し、世界革命勝利の思想的物質的前提条件をつくり出していくものとしてあった。

② 日帝の（アジア↓世界↓）への新植民地主義侵略は、目に見えるようなかたちで、一挙になされるものではない。それは、容易には侵略とは映らない、個々の企業の長期にわたる侵略活動の具体的蓄積の総体としてある。それ故に、我々は、この日帝の新植民地主義侵略の総体を形成している個別具体的な侵略活動をこそ、具体的に攻撃し、阻止し、粉碎し、この個別的戦闘の具体的勝利の蓄積を通して、内外呼応して日帝を撃つ狭撃陣型を構築し、日帝の生命線たる新植民地主義侵略を、総体として粉碎していかなければならない。キノダニ・テメンゴール作戦はこの方向をさし

示した。

③ キノダニ・テメンゴール作戦は、個別企業に対する武装攻撃ではあったが、単に個別企業に対する攻撃戦術の次元を越えて、日帝の新植民地主義侵略総体と根底的に対決する戦略的質をもっていた。すなわち、キノダニ・テメンゴール作戦は、日帝の新植民地主義侵略を軸とした反革命戦略を具体的に破産させ、世界帝国主義打倒・日帝撃滅の世界革命戦略を物質化せんとするものであった。

マラヤ「辺境」開発のためのテメンゴール・ダム建設は、日帝の新植民地主義侵略の典型である。マレーシア経済の見かけだけの繁栄、それは、まさにUSA帝・英帝・日帝の金融・独占資本による新植民地主義支配がもたらしたものであり、外国資本の搾取・収奪の下で、人口の80%が極貧層という状態がくり出されている（世界帝国主義の中枢帝国が、政治的には主権国家として独立している周辺諸国を、資本輸出・貿易・経済援助等によって経済的に従属化し、現地支配層と癒着して、現地人民を搾取・収奪するというのが新植民地主義の特徴である）。そして、このような中であって日帝金融資本が、より一層現地支配層と結びつき、日帝の新植民地主義侵略を推し進めるべく、現地政権の「工業化」政策を資金的にバックアップし、間組に請負わしたのが、テメンゴール・ダム建設であった。

当時のマレーシア・ラザク政権にとって、このマラヤ「辺

境」侵略Ⅱテメンゴール・ダム建設は、東西ハイウエー建設工事とともに「後進農業国」から「中進工業国」への飛躍を賭けた第二次工業化計画の目玉事業であり、それゆえ、その成否は、ラザク政権の政治生命をも左右する工事であった。さらに、それ以上に重要な目的は、このテメンゴール・ダム建設および東西ハイウエー建設工事によって、テメンゴール峡谷一帯を湖水の下に沈め、原生林や山岳を切り拓き、マラヤ共産党武装勢力の根拠地を破壊することにあつた。テメンゴール・ダムおよび東西ハイウエー建設工事は、その経済的効果とともに、ゲリラ根拠地の破壊という政治的軍事的狙いがあつたのである。

ラザク政権が、日帝金融資本からの円借款を頼りに、この反革命工事に注ぎ込んできた資金は年間四千万ドルに達した。これに加えてラザク首相は、一九七五年六月、年間二億ドルのテメンゴール防衛特別予算を認可している。このこと一つとってもラザク政権にとつてのテメンゴール・ダム建設工事の重大性は歴然としている。この工事の成功は、自らの政治的経済的地盤を固め、マラヤ共産党武装勢力の力を殺ぐという一石二鳥の効果をもっていたのであるから、このような熱の入れようは当然であつたろう。

他方、日帝にとつて、このテメンゴール・ダム建設工事は、ラザク政権への円借款と結びついていた。すなわち日帝金融資本による、マレーシア経済に対する支配力の強

化、新植民地主義侵略の戦略的布石であり、今後の東南アジア再侵略の成否を占う試金石でもあつた。それ故、どんな犠牲を払おうとも、日帝の威信にかけても必ず成功させなければならぬ工事としてあつた。マラヤ現地と日帝本国国内での幾たびかの武装攻撃と警告にも拘らず、一九七五年七月一日海外経済協力基金が総額八八億円の第二次借款の供与を決定しているのは、その現われである。

間組のマラヤ「辺境」侵略を先導し、現地政権の窓口になつたのは日帝独占資本の中枢部隊Ⅲ三菱商事であつた。三菱商事は、すでに戦時下の南ベトナム、ラオスでの、反革命側に立った工事経験をもち間組の、まさに、その戦時下における工事経験を買ったと言えよう。間組にとって、このテメンゴール・ダム建設工事は、単に個別企業の請負った工事としてあつたのではなく、まさに、日帝の国家的政治行為としてあつたが故に、個別企業の利害を度外視してもやり切らねばならぬ工事であつた。と同時に、不況・国内市場の狭あい化による海外侵略の必然的傾向という情勢の中で、この工事の成功いかんは戦時下南ベトナム・ラオスでの実績を踏まえた上での、今後の間組自身の中東方面へまで手を広げた、海外戦略をも左右する戦略的布石としてあつた。

それゆえ、間組にとつて、テメンゴール・ダム建設は、たとえマラヤ共産党武装勢力の再三の警告があり、さらに

武装攻撃を受け、社員家族に死者が出ようと、決して止める訳にはいかない工事としてあり、現地反革命軍の尻を叩いて強行せねばならぬものとしてあった。間組に対するマラヤ共産党武装勢力の攻撃は、まさしく日帝の新植民地主義侵略の反革命の本質を暴露した。すなわち、間組は、現地政権に対して、マラヤ共産党武装勢力への徹底弾圧を要求し、日帝反革命軍の現地派遣にかえて、現地反革命軍に防衛されて工事を行なうことによって、その反革命性を自己暴露したのである。

そして、マラヤ共産党武装勢力の、間組に対する武装攻撃に呼応・合流した、東アジア反日武装戦線三部隊のキンダニ・テメンゴール作戦は、マラヤ「辺境」侵略の後方根拠地たる日帝本国の、間組本社という侵略活動の中枢を武装攻撃することで、日帝を内外呼応して挟撃する陣型をつくり出しつつ、侵略活動に具体的打撃を与え、また、間組の幹部をして、「海外に活路を見出すしかない。こんなことで海外の建設工事を中止したりする気持は絶対にない」(75・3・1付毎日。副社長竹内談)と、日帝のアキレス腱の所在と、日帝の新植民地主義侵略の反革命の本質を言わしめた。

④ キンダニ・テメンゴール作戦は、マラヤ人民の血債的つきつけに対して、日帝本国人が真に應えるべき道を示した。

の命を奪い(なかでも当時の新興財閥日室コンツェルン野口遵の朝鮮水力電気KKから鹿島組等とともに請負った赴戦江ダム・長津江ダム工事が有名である。——朴慶植著『日本帝国主義の朝鮮支配(下)』、現代史出版会刊)朝鮮人強制労働の記録(参照)、巨額の資本を蓄積した。また間組が朝鮮で請負った工事の多くは日帝の侵略植民地支配の根幹ともいべき軍事鉄道網であった。

さらに、日帝の中国大陆への侵略拡大にともない、間組は、日帝反革命軍にびったりとよりそって、中国大陆へ侵出し、反日パルチザンの武装攻撃から日帝反革命軍に防衛されつつ、中国人労働者に対する使い殺しのタコ部屋の奴隷労働によって、多数の中国人労働者の命を奪い、巨額の資本を蓄積した。

一九四一年以降は、日帝の侵略戦争拡大にともない、朝鮮・中国大陆のみならず、台湾・タイ・フィリピン・ビルマへも侵出し、日帝反革命軍に対する全面的な軍事協力を行なうとともに、日帝本国内においても、朝鮮人・中国人(約二千人)を強制連行し、使い殺しのタコ部屋の奴隷労働によって軍関係工事を行ない、多数の朝鮮人、中国人(約百数十人)を虐殺し、巨額の資本を蓄積した。

一九四五年八月一日以降、間組は他の土建資本と共謀して、侵略戦争中の朝鮮人・中国人強制連行、虐待、虐殺の責任追及から逃れるため、組織的に証拠湮滅を計り、逆

日帝反革命軍は、マラヤ占領中、数十万にものぼるマラヤ人民を殺害し、龐大な量の天然資源等を強奪した。そしてこのオトシマエはまだついていない。マラヤ人民は日帝本国人に対して血債を要求している。「日本帝国主義がわが国の人民に対して犯したこれほど深い罪は、今日に至るまで未だ清算されておらず、また日本帝国主義が借りたままにしている山よりも高い血のつぐないは今に至ってなおつぐなわれてはいない。二九年の年月が過ぎ去った。しかしわが国の人民はこの深い恨みを永遠に忘れはしないだろう」(『陣線報』一九七一年一月一日)と、マラヤ共産党は、マラヤ人民を代弁して言っている。キンダニ・テメンゴール作戦は、日帝本国人が、体を張って、命がけで、オノレの歴史的現在の反革命性を実践的に自己否定せんとすることによって、マラヤ人民の血債要求に真に応えようとしたのである。

間組は、その創業時から東アジア諸国人民に対する日帝の侵略反革命と伴にあり、その一端を具体的に担い、日帝の膨張とともに膨張し今日に至っている。

間組は、先ず、日帝本国における鉄道土木工事を中心とした、日本人下層労働者に対する使い殺しのタコ部屋の奴隷労働によって土建資本としての土台を築き、日帝の朝鮮侵略の開始とともに朝鮮へ侵出し、以降朝鮮人労働者に対する使い殺しのタコ部屋労働によって多数の朝鮮人労働者

に多額の国家補償を強奪した。USA反革命軍の工事を請負うことで、戦後の発展の土台を築いた間組は、日帝本国内においては日本人下層労働者を強搾取・虐殺(例えば、一九六九年、東京都の荒川放水路の第二新四つ木橋建設現場で八人の出稼労働者を水死させている)しつつ、日帝の新植民地主義侵略の一環として、内戦状態の南ベトナム、ラオス、マラヤに侵出し、現地反革命政権と結託し、革命勢力に敵対した。

間組の今日は、まさに、東アジア諸国人民と日帝本国人下層(無産)プロレタリアートの血と屍の上に築き上げられている。

⑤ キンダニ・テメンゴール作戦は、間組の、東アジア諸国人民に対する侵略反革命史、なかでも朝鮮人・中国人の強制連行・虐待・虐殺に対する歴史的怨念を晴らし、かつ一九四五年一〇月の木曾谷における中国人の反日武装蜂起の革命的伝統を継承・発展させんとするものであった。

⑥ キンダニ・テメンゴール作戦は、間組によるタコ部屋の奴隷労働によって酷使され虐殺されてきた山谷・釜ヶ崎等の日帝本国人下層(無産)プロレタリアートの怨みを晴らし、一方では日帝の土建資本に搾取されつつ、他方では日帝の東アジア侵略の先兵となってきた日帝本国人下層(無産)プロレタリアートが自らを解放する戦いの根源的方向を実践的に示した。

(二) 問われている課題

(1) 戦闘指令

キシダニ・テメンゴール作戦以降、日帝の新植民地主義侵略下の人民・戦士たちは、われわれ日帝本国人に、いくつもの戦闘指令を発している。主要なものに次のようなものがある。

- ① 一九七六年二月二三日、ミンダナオ島北西部の工業都市イリガン市で、モロ民族解放戦線戦士が、水力発電所工事現場を武装攻撃した。この水力発電所工事は、フィリピン電力庁がアジア開発銀行の融資と日帝侵略企業（導水管関係の栗本鉄工所、ダム建設指導のための熊谷組、建設機械納入維持の日立建設機械等）の協力を得て行なっていたもの。この工事は、土地買収をめぐる地元イスラム教徒の反対闘争に合い、半年以上遅れてようやく始まったが、マルコス大統領の至上命令で陸軍一個大隊が警備していた。
- ② 一九七七年七月二三日。西バプア独立軍は、夜明けを期して、エルツブルグ銅山（フリーポート・インドネシア会社——日本の銅山八社が買収融資を行なって開発）を武装攻撃した。西バプア独立軍指導の下に同鉱山のダイナマイトを入手したゲリラ達は、先づ同鉱山の電話線を切断し、銅山から銅鉱の積出港アマパレ迄一〇四キロにわたって施設された（銅山は海拔約三千メートルの地点にある）直径一〇

cmの粉砕輸送パイプラインを破壊し、これと併行して山元から二八Kの低地にある石油貯蔵所及び送油設備のほか鉱山の諸設備も爆破した。これらの攻撃によってフリーポート・インドネシア会社は、実に百万ドルもの損害を受け、毎日、日帝本国を主な仕向地として船積する銅鉱七七〇万ドル分はアマパレ港に備蓄されていたものから船積みしなければならなくなった。

- ③ 一九七八年五月一七日、FARN（民族抵抗武装勢力）は、インシンカ社長松本不二雄を捕捉し、同年二月七日には、インシンカ取締役経理部長鈴木孝和を捕捉した。インシンカはエルサルバドルで、最大の紡績合併企業であり、一九六七年設立、日帝側（東レ、三井物産、蝶理、岐染）とエルサルバドル産業開発公団が、それぞれ五〇％の出資、資本金約二六億円で、日帝本国から合繊原料を輸入し、現地の労働者を低賃金で使って、ポリエステル・レーヨンの織物を作り、ニカラグア、コスタリカ等中美五カ国で作る中美共同市場へ売り込み、利潤は日帝本国に送金するという三国間貿易を利用した典型的な新植民地主義企業。「日本人は、しほれるだけしほって、利益は全部日本に持つていく」とエルサルバドルの人民は批判している。

- ④ 一九七八年一月五日。イランの人民が、イラン日本国際銀行（東銀二〇％出資）、日本料理店弁ヶイ、三井物産支店を攻撃。バンドルシャプールの石油コンビナート（三

井物産が出資）の建設現場では、「日本人は帰れ」のなく書きが表われた。

これらの戦闘指令（つきつけ）に対して、残念ながら、われわれ日帝本国人は呼応し切れていない。われわれはこのことを痛烈に自己批判し、一日も早く戦闘体制をつくり出さねばならない。なぜなら、日帝本国人は総体として、歴史的にも現在のにも、被植民地人民に寄生しているが故に、日帝中枢を武装攻撃する事実行為で、オノレの歴史的現在の反革命性を実践的に自己否定することを通してのみオノレを世界革命主体として形成し得るのであり、反日の大義に志願し、被植民地人民の戦闘に、日帝本国内から呼応・合流していくことによってのみ、世界革命の展望を切り拓くことができるからである。

(2) 何をなすべきか

われわれは、問われている実践的課題を次のように考えている。

第一に、キシダニ・テメンゴール作戦が切り拓いた中枢殲滅戦の地平を断乎として継承し、発展させ、日帝中枢に第二・第三のキシダニ・テメンゴール作戦を実現させること。

第二に、この中枢殲滅戦を軸としつつ、反日武装闘争をより大衆化し、その裾野を押し広げ、大衆的反日都市ゲリラ戦として発展させること。

第三に、この中枢殲滅戦を軸とした大衆的反日都市ゲリラ戦の発展を支える非公然支援網を、日帝市民社会の内部に定着させ拡大させること（なぜなら、前戦部隊の質的飛躍・量的拡大は、非公然支援網の拡大に大きく依存している）。

第四に、国外反日武装勢力との組織的結合である。

調査不足・訓練不足・準備不足のまま、気だけあせて中途半端な戦闘をやることは避けねばならぬが、また戦闘を先へ先へとのぼす待機主義も否定されなければならない。反日武装闘争は、決してむずかしいものではない。十分な調査、十分な訓練、十分な準備を行なうならば、数人でも、あるいは一人でも、勝利的に展開することができる。要は、反日武装闘争の勝利を確信し、反日兵士としての第一歩を、ためらわずに確実に踏み出すことである。

同志諸君！ ただちに非公然地下体制を構築し、中枢殲滅戦を軸とした大衆的反日都市ゲリラ戦を展開しよう！

友人諸君！ 大衆的反日都市ゲリラ戦の勝利の鍵を握る非公然支援網を広範につくり出そう！

(三) 我々の任務

75年5・19弾圧によって「狼」「大地の牙」「さそり」は、その組織性を解体してしまった。バラバラに解体してし

の発行を通して、なによりも反日潮流の武装力の強化と思想的団結の深化を追求する。

一九七九年二月

まったわれわれの克服へ向けての作業は先ず、個々人の自白・屈服の自己批判・総括として問われた。われわれは、そのことを確認し、個々が自白・屈服の自己批判・総括を深める中で、真の意味での組織再建を克ちとるべく努力してきた。

われわれの自白・屈服からの克服、組織再建へ向けての努力を支えてきたのは、何よりも自らが担った戦い、なかなしくキソタニ・テメンゴール作戦に対する矜持であり、K戦士の5・19の戦いであり、F戦士の6・25の戦いである。そして、日常的な獄中実力闘争と獄中獄外を貫く相互批判——自己批判を軸とした思想闘争こそ、克服へ向けてのテコであったと言える。われわれは、K戦士・F戦士の遺志を確固として継承する意を込めて、われわれが再建をめざす組織の名をKF部隊と名づけている。

獄中公然部隊を強いられているわれわれは、自らの任務を次のように規定している。

その第一は、反日武装闘争を展望しつつ、日帝権力と実力で対決する獄中闘争の展開である。この獄中闘争を通して、獄中獄外の人民を反日潮流へと組織化することである。

第二は、反日潮流の実践的武装化と路線的深化のための思想闘争↓情宣である。

われわれはこの二つの任務を遂行する一つの手段として『腹腹時計』の発行を行なう。われわれはこの『腹腹時計』

日帝本国における反日武装斗争史(抄)

71・12・12

静岡県熱海市伊豆山の興亜観音像（皇軍の南京大虐殺を清算するために建てられたもの）と殉国七士の碑（A級戦犯の慰霊碑）を同時爆破

72・4・6

神奈川県横浜市鶴見の曹洞宗大本山総持寺納骨堂（朝鮮侵略日本人植民者の遺骨が、慰霊観音像を建てられる前提で納められていた）を爆破

10・23

「北海道」札幌市北海道大学文学部北方資料室（アイヌモシリ侵略のイデオロギー形成とアイヌ文化遺産収奪の拠点）と旭川市常盤公園内風雪の群像（アイヌモシリ侵略の記念ブロンズ像）を同時爆破

74・8・30

東京都千代田区三菱重工本社を爆破（白昼、歩道に爆弾を仕掛けるという作戦上の失敗から通行人多数を殺傷）

10・14

東京都港区三井物産本館業務部極東室、総務部総務室を爆破

11・10

「北海道」札幌市「北海道」神宮を放火

——東アジア反日武装戦線“狼”の前身部隊

——アイヌモシリ部隊

74
・
11
・
25

東京都日野市市人中央研究所配電盤室を爆破

――東アジア反日武装戦線“狼”部隊

12
・
10

東京都中央区大成建設本社一階を爆破

――東アジア反日武装戦線“大地の牙”部隊

12
・
23

東京都江東区鹿島建設建築本部内装センターPH工場を爆破

――東アジア反日武装戦線“さそり”の前身、抗日パルチザン義勇軍“さそり”部隊

75
・
2
・
28

東京都港区間組本社6階海外事業本部、9階電算機コンピュータ室と埼玉県与野市間組大宮工場を同時爆破

――東アジア反日武装戦線“さそり”・“狼”・“大地の牙”部隊

4
・
19

東京都中央区韓国産業経済研究所（韓国・台湾・マラヤなどへの日帝企業の侵略幹旋機関）と兵庫県尼崎市オリエンタルメタル製造本社（韓国産業経済研究所が主催した韓国工業視察団の筆頭企業）を同時爆破

――東アジア反日武装戦線“大地の牙”部隊

4
・
27

千葉県市川市間組江戸川作業所を爆破

――東アジア反日武装戦線“さそり”部隊

5
・
4

東京都江戸川区間組江戸川作業所のコンプレッサーを爆破

――東アジア反日武装戦線“さそり”部隊

5
・
19

東アジア反日武装戦線3部隊の8名逮捕され、斉藤和戦士は日帝との一切の妥協を拒否して服毒自決

――東アジア反日武装戦線

5
・
29

東京都立川市立川駅北口派出所を爆破

5
・
25

愛知県名古屋市長古屋駅西口派出所前コインロッカーを爆破

5
・
25

愛知県名古屋市長古屋駅西口派出所前コインロッカーを爆破

――東アジア反日武装戦線

75
・
6
・
25

船本洲治戦士は、皇太子アキヒト、ミチコの沖縄上陸に抗議して、沖縄の大地で焼身自決

沖縄ひめゆりの塔、白銀病院において皇太子アキヒト、ミチコに対して火炎びん攻撃

――沖縄人2戦士、日本人2戦士

7
・
19

「北海道」札幌市、「北海道」警察本部警備部を爆破

――東アジア反日武装戦線

7
・
23

沖縄海洋博会場、チリ反革命海軍練習艦エスメラルダを火炎びん攻撃

――木田明夫戦士

8
・
4

佐々木規夫戦士は、日本赤軍の獄中戦士尊厳闘争により、他の4戦士とともに解放される。

東京都杉並区高円寺駅前派出所、中央区銀座三原橋派出所、練馬区小竹町派出所を同時爆破

――東アジア反日武装戦線

8
・
14

東京都渋谷区、千駄ヶ谷駅前派出所、代々木駅前派出所を同時爆破

――東アジア反日武装戦線

9
・
24

東京都杉並区、荻窪駅前派出所を爆破

大阪市北区、大阪三井物産ビルを爆破

京都市東山区、韓国学園移転予定地反対住民居住区を爆破

――闇のつちぐも

76
・
1
・
6

京都市左京区、平安神宮を放火

「北海道」札幌市、「北海道」庁一階ロビーを爆破

――東アジア反日武装戦線

77
・
1
・
1

京都市上京区梨木神社本殿を爆破

――世界赤軍日本人部隊・闇のつちぐも

大阪市北区、東急観光ビル内東急観光を爆破

「北海道」旭川市、「北海道」警察旭川方面本部を爆破

東京都文京区、東京大学法文一号館を爆破

——世界革命戦線・大地の豚

東京都世田谷区代沢5-4-15、三井アルミ社長川口勲宅を爆破

——世界革命反日戦線・タスマニア1876

浴田由紀子戦士と大道寺あや子戦士は、日本赤軍の獄中戦士奪還闘争により、他の4戦士とともに解放される。

東京都渋谷区神社本庁一階ロビーを爆破

——世界革命反日戦線『大地のブタ』

11・2

京都市下京区東本願寺大師堂を爆破

——世界赤軍日本人部隊・やみのつちぐも